

みんなでおならをしてみよう おならで乱交

「ちっ、またダメだったよ。なかなか上手くいかないもんだな」

サトルは友人のコウヤ、マサトとため息を漏らした。

「やっぱり飢えてたらダメなのかな。いつまで経っても……」

「だな。追いかけても逃げていくばっかなんだよ、女ってさ。やっぱり」

「こんなしょぼついたチンポばかりでさ。情けねーよな」

やつれた顔を見合わせる。

出会い系サイトで失敗。好みの女性には出会えず落胆ばかり。

愚痴をこぼしながら街を歩く3人。

することは女探しの日々。うまくいかない日々が続いていた。

「気を取り直してここでお茶でも飲もうぜ。良さそうなカフェっぽいよ」

3人は小さなそのカフェの軒をくぐる。

カウンターには二人の髪の毛の長い女性が座っていた。

そばを通るとほのかに香水の香り。店内の落ち着いた雰囲気と相まって再び3人の本能を少しくすぐった。

「いらっしやいませっ！！！」

一人の若い女の子が3人に声をかける。ウェイトレスの女の子だ。アルバイトだろうと思われた。

スカートから出たピチピチの太ももは歩を進めるたび揺れていた。

すると、突然その店員の女の子がアイスコーヒーを乗せた丸いトレイを床に落としてしまう。

「ガシャンッ！！！」

大きな音がした。店の客たちが振り向く。

まあ店ではよくあることではあるけれど、落ちたガラスコップは粉々に砕け散った。さすがに3人は少し驚く。

「だ、大丈夫ですかっ！！？」

カウンターにいた女の子たちも店員に駆け寄った。

少し腰をかがめ、心配そうに走り寄る。

二人ともジーンズをはいていた。むっちりとした足がはっきりと分かった。

サトルたちも女の子二人に続いてそちらに駆け寄る。

クイツとお尻を突き出して、女の子たちは店員を助けた。

「大変だったですね」

「ご、ごめんなさいっ！！わ、私の不注意でっ！！」

少し汗ばむ額。店内の皆に注目される。

サトルもマサトと一緒に女の子に声をかける。

「びっくりしましたよ。大丈夫ですか？」

「今拾いますからっ」

少し華奢で学生かと思われるキュートな風貌だ。

「ありがとうございますっ！！なんかすみませんっ！！」

腰をかがめる店員さんのスカートの中の内腿がサトルたちに少し見えた。

少し膝を内側に寄せ、恥ずかしそうに床に落ちたコップを拾い、水浸しの床をホールの棚に置いてあった水色のダスターで拭く。

女の子の匂いがサトルたちに届く。甘い女の子の香りがした。

二つのガラスコップの破片を処理するのに少し時間がかかった。

外は快晴の天気。なんらかの意思の疎通があったのか。それとも運命か。

サトルたちは店員さんを助けた女の子二人と一緒にカフェをすることになった。

「この近くに住んでおられるんですか??」

「そうなんですっ！！近くの街の一緒のマンションに住んでて・・・」

二人はOL。曲がりなりにも??会社員として働いている3人の愚男とは話

が通じるものがあった。

女性二人は足を組んだりほどいたりする。

男3人に興味があることがはっきりと分かった。

「結構暇なんだよねえ。最近……」

「そ、そうなんですかつ！！？俺たちも実はすごく寂しい仲間同士で……」

話は一気に弾み時間が流れる。

あっという間に友達のようになった。

更に、後になってカフェの店員さんも一緒になった。仕事の時間が終わった後だ。

カウンターにいた女性はそれぞれユウカ、ミナコ、カフェの店員の女の子の名前はアズサだ。

「さきほどはすみませんほんとに」

「店主さんに怒られませんでしたか??」

ニヤニヤしながらサトルが言う。

「はい、ちょっと……」

「はははっ……まあ落ち込まないようにっ！！」

照れ笑いする女の子。

「は、はいっ……ふふっ……」

穏やかな気候の街。偶然より運命に感じてくる6人の男女。

どこかではじめからこの出会いが定められていたような……。

意気投合は極まり、

4日後に会うことが決まった。

カフェの夕暮れ。外は薄暗い。

「会おっ！！会おっ！！！！どんなエッチなことするうっ！！？」

みんな満面の微笑み。意気投合。

会話のトーンは初対面とは思えないほどフレンドリーに変わっていた。

「そうだね・・・ちょっと恥ずかしいけど・・・とにかくみんなで裸になりたい・・・」

「裸っっ！！裸っっ！！すっごいいいじゃんっ！！！」

内股に足をもじもじさせ、楽しみを表現する女の子たち。

馬鹿男3人組の股間は、ジーパンを突き破りそうに勃起していた。

「じゃあ4日後ねっ！！楽しみにしてるからっ！！！」

「お風呂に入ったらずっと勃起してるよ俺たちきつと。次会うことを想像して」

「ええええーっ！！やらしーっ！！やっぱ男ってこれだから嫌だよねえっ！！」

「そうそうっ！！女と会うってなると必ずビンビンなんだもんっ！！！」

「お風呂で勃起して、そのまま手も使わずに射精しないように気を付けてねっ！！！」

「む、無理だと思う・・・・・・・・・・」

実際、サトルたちはその日の夜、風呂へ入ると・・・・・・・・・・。

「で・・・・・・・・・・でちゃう・・・・・・・・・・」

ペニスの先からは大量の精液。

女の子3人と会うと想像しただけで、自動的に股間についた肉ホースは反り立ち、発射してしまう。

バネのような肉ホース。

「うっっ！！！」

「びゅっ！！！！びゅっ！！びゅっ！！びゅっ！！びゅびゅびゅっっ！！！！」

ホースの先をしぼった水しぶきのように、噴水が噴き出す。

肉のふと長い棒からトロトロの液体が噴き出る。

「あああっ！！アズサちゃんっ！！んあああっ！！！」

もう想像の世界ではない。今ここにアズサちゃんがいるかのようなリアルさ。

自分の健康を自分で恨んだ。恨みきった。

お腹に張り付くほど反り返ったペニスは、これから起こるであろう素晴らしいセックスをまさに象徴していた。

手でしごく。

「シュコシュコシュコシュコシュコッッ！！！！！」

しかししごかなくても、勝手に出てくる。

1リットルのペットボトルの量くらいの白濁液が噴射し続ける。

小さな金玉に入りきっているとは到底思えない。

「このペニス！！ペニスをっ！！ペニスを舐めてくれるんだねっ
っ！！！！」

————— 体験版はここまでです。—————